戸山陸軍学校・軍楽隊あれこれ

文責:則松久夫　2017.11.25

（戸山学校創設） 日本陸軍の歩兵部隊・士官養成機関として、戦術、体育、軍楽を教育する軍学校（実施学校）が、戸山に設置された。その経緯を遡ると、当初は 1873 年（明治 6 年）6 月、旧尾張藩下屋敷跡に陸軍兵学寮戸山出張所が設置され、上下士官の訓練事務を始め、翌 1874 年（明治 7 年）2 月、陸軍戸山学校と改称、射撃、銃剣術、体操、攻守戦法、操練、諸勤務、喇叭を教授した。

（陸軍軍楽隊） 1888 年（明治 21 年）、馬場先門外の第一軍楽隊等を 1891 年（明治 24 年）に戸山学校内へ移転したのが、のちの陸軍を代表する軍楽隊、陸軍戸山学校軍楽隊の嚆矢となる。

（海軍の軍楽隊） 海軍では鎮守府に軍楽隊を置き、横須賀海兵団軍楽隊から隊員を派遣。別に、横須賀海兵団東京分遣隊が海軍軍楽隊の総本山。練習艦隊や行事等で海外に派遣される軍艦には、選抜された隊員で組織された軍楽隊が乗り組み、諸外国を歴訪。

（最初の軍楽隊） 日本の軍楽隊ならびに日本の吹奏楽の歴史は、明治 2 年 9 月、薩摩藩の青年 30 人が横浜に駐屯していたイギリス陸軍歩兵軍楽隊について軍楽を修習したことに始まる（薩摩バンド）。1871 年（明治 4 年）、海陸軍（日本軍）の制度が成立すると、この 30 人が陸軍・海軍に別属させられ軍楽隊が発足した。翌 1872 年（明治 5 年）の鉄道開業式では早くも公の場での演奏を行っており、明治期には鹿鳴館での奏楽なども担当した。

（式典奏楽曲） 日本軍の制定礼式曲の筆頭は陸軍が分列行進曲、海軍が軍艦行進曲である。双方とも原曲があり、その作詞が共に学者である点、興味深い。分列行進曲は明治 15 年の「抜刀隊」（西南戦争官軍、「田原坂戦闘」の警視部隊を讃える歌）で日本最初の新体詩集に帝大の文学部長・外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の各博士の共篇とされている。後者は和歌山での南方熊楠の恩師、後に華族女学校の教師となる鳥山啓（植物学）明治 30 年作詞の「軍艦」である。
作曲は分列行進曲が、日本が招聘したフランス陸軍の音楽将校・シャルル・ルルーであり、明治 18 年に鹿鳴館で発表され、明治天皇が大いに気に入り、アンコールを出したと言われる。（爾来、戸山軍楽隊による編曲を経ている。）
「軍艦」は 1897 年（明治 30 年）頃に、准士官相当官の海軍軍楽師だった瀬戸口藤吉が新たに作曲し、1900 年（明治 33 年）に「軍艦行進曲」として誕生した（この当時、軍楽科の最高階級は軍楽師であった。昭和 18 年には軍楽少佐までの階級が設けられた。陸海軍とも軍楽隊長の地位は低く尉官レベルであったが太平洋戦争期、佐官クラスへ。

抜刀隊の歌詞（1 番のみ）

1.吾は官軍我が敵は　天地容れざる朝敵ぞ　敵の大将たる者は　古今無双の英雄で（註：西郷隆盛のこと）これに従うつわものは　共に慄悍（ひょうかん）決死の士　鬼神に恥じぬ勇あるも　天の許さぬ反逆を 起こせし者は昔より 栄えしためし有らざるぞ　敵の亡ぶるそれ迄は　進めや進め諸共に　玉散る剣（つるぎ）抜きつれて　死する覚悟で進むべし

（外山正一はミシガン大学を卒業、米国の南北戦争の後で、アメリカの軍歌から強い影響を受けてこの歌詞を作ったものと考えられ、歌詞の終末四句を毎節繰り返す点などは、アメリカの軍歌の形式を踏襲したものとされる。）

軍艦の歌詞（1 番のみ ）

1.守るも攻むるも黒鐵（くろがね）の　浮かべる城ぞ頼みなる　浮かべるその城日（ひ）の本（もと）の　皇國（みくに）の四方（よも）を守るべし　眞鐵（まがね）のその艦（ふね）日の本に　仇なす國を攻めよかし

（参考 1） 軍歌とは、軍隊内の士気高揚の目的で作られる歌であり、狭義には、上記のように軍隊での礼式に使われる曲、部隊の団結を高める「部隊歌」等の軍部公認曲を言う。
　一般国民の宣威高揚や、国の軍事政策を協賛・宣伝するために制作された「戦時歌謡曲」と区別される。後者でも、レコーディングに際し、軍楽隊がビクター、コロンビア協力して吹き込んだ例は多数ある。

（参考2）「海ゆかば」は礼式曲なのか?

東京音楽学校作曲科教授・信時潔が 1937 年（昭和 12 年）に国民歌謡運動で作曲。最初に音楽学校声楽トップの沖縄出身・波平暁男に模範独唱させた。歌詞は『万葉集』巻十八「賀陸奥国出金詔書歌」（大伴家持）。日本放送協会、大阪（JOBK）は国民精神総動員強調週間に則り、歌謡軟弱化を憂い「国民歌謡」運動を興した。これは戦後「ラジオ歌謡」となる。当初は椰子の実、春の唄、朝等が歌われたが日華事変の進行で、愛国行進曲や愛国の花等次第に愛国調の色彩が多くなってきた。そしてこの重苦しい、「海ゆかば」が登場した。これはやがて、準式典曲、準国歌的に採用されるようになった。したがって実質的には歌謡曲から式典曲に格上げされたものと言えよう。この曲は、大きく国民の人気・支持を得たのであった。

（参考 3） 軍楽隊は全国の各師団の部隊の委嘱を受け相当数の部隊歌の作曲を全国向け、提供したと思われる。全国の小学校から大学まで「校歌」を制定したのと同じである。

その典型的な一例を紹介する。新鋭の陸軍戦闘機である一式戦(紀元 2601 年の 1)「隼」を起用し活躍した陸軍飛行第 64 戦隊は、ノモンハン戦のホロンバイル航空隊の頃より、第 64 部隊歌」を保有しており、これは、支那方面軍軍楽隊の守屋五郎隊長が当隊より依頼を受け部下隊員の原田喜一が作曲。後に、戦時慰問団でこの部隊歌を気に入り、軍楽隊作曲とはつゆ知らず、現地で採譜した歌手・菊池章子(戦後「星の流れに」を歌う)は、この譜面を山本嘉次郎監督の映画「加藤隼戦闘隊」に提供し主題歌として一般に広まったともいわれている。昭和 19 年 3 月上映。陸軍省報道部、陸軍航空本部、明野陸軍飛行学校が実機・隼の飛行編隊も提供し協力。この部隊歌は広義、狭義でも代表的「軍歌」の典型となった言えよう。

（主な陸軍軍楽隊―終戦時）

明治 24 年、戸山に始まった陸軍軍楽隊も、太平洋終戦時には下記の如くアジアの要所に「分散」して設置された。陸軍軍楽隊（陸軍戸山学校軍楽隊・東京）、関東軍軍楽隊（新京）、支那派遣軍楽隊（南京）、南方軍軍楽隊（新）（サイゴン）、第 2 総軍軍楽隊（広島）、北支那方面軍軍楽隊（北京）、その他、フィリッピン、ジャワ、ビルマ、マレーシアに設置。南方軍軍楽隊は 1944 年 10 月、南方軍総司令部のマニラからサイゴンへの移転同行中、洋上で乗船が撃沈され隊長大沼哲少佐以下隊員 25 名が戦死し後に再編。

（軍楽隊の教育）

軍楽隊と言えば吹奏楽器の演奏が主眼であるが、複数楽器の吹奏を熟すことや楽理、作曲技法の教育まで及んでいた。そして創成期のイギリス、フランス、ドイツ音楽将校の指導から、東京音楽学校に依存することにもなる。

爾来、技量優秀な者は東京音楽学校に特修生として派遣され、より高度な教育を受けることが出来た。そして、吹奏楽のみならず、弦楽器に関する教育も行われ太平洋戦争敗戦まで教育が続けられ、ベートーヴェンの交響曲などもレパートリーにしていた。昭和天皇は、皇太子時代の 1921 年、初めてヨーロッパに出向いたが、そのお召艦「香取」には海軍の軍楽隊が随行している。その一員に若き江口夜詩（1903－1978）がいた。彼も音楽学校国内留学生の一人である。昭和 3 年には昭和天皇即位大典演奏会で吹奏楽大序曲『挙国の歓喜』を発表。彼昭和 6 年除隊後、歌謡曲作曲家となり、後に人気を博した「艦隊勤務」（「月月火水木金金」）や海軍報道班のルポルタージュ記録映画「轟沈」の主題歌、柔らかい処では「十九の春」を作曲、戦後は「憧れのハワイ航路」が受けた。

（学徒出陣壮行式の行進曲演奏）

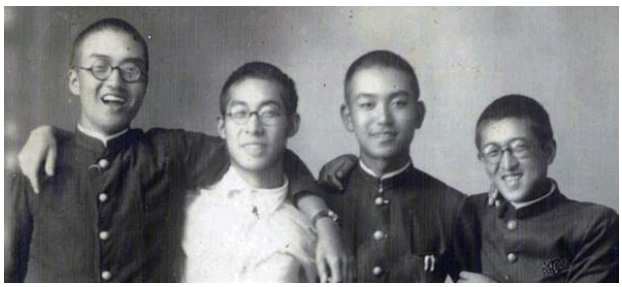
第 1 回学徒兵入隊を前にした 1943 年（昭和 18 年）10 月 21 日、東京の明治神宮外苑競技場では文部省学校報国団本部の主催による出陣学徒壮行会が開かれ、東條英機首相、岡部長景文相らの出席のもと関東地方の入隊学生を中心に 7 万人が集まった。（出陣学徒計 77 校、これを見送る学徒 96 校約 5 万名）出陣学徒壮行会は、内外地各地でも開かれた。この壮行式の行進曲は戸山軍楽隊約 50 名による陸軍分列行進曲である。

降りしきる秋雨はチューバに雨水を溜め、隊員は時折、逆さまにして「排水」 を余儀なくされた。

（東京音楽学校在校生の入隊）

戦争末期に、東京音楽学校の優秀な在学生が入隊した。これは、音楽学校関係者が戸山学校軍楽隊長・山口常光陸軍少佐の元を訪れ、「学徒動員で狩り出されるなら、むしろ音楽技術を以って戦争協力させたい」 と申し入れ、山口が承諾したことによるが、戸山学校に昭和 19 年軍楽生徒として入隊した。結果的に最後の卒業生となり、芥川が

総代を務めた。最後の軍楽生徒となった 118 名の卒業成績列序名簿なる資料が存在し、成績順に 1 番から 118 番まで全員の名簿が卒業生（斎藤高順）宅から後に発見された。首席は芥川也寸志、團伊玖磨は 4 番、斎藤高順は 10 番、奥村一は 33 番と記されていた。この 4 名は無傷で生き残り、戦後音楽学校に復学したが、卒業席次は問題外で、それぞれ、戦後もクラッシック音楽作曲活動で活躍した。また、4 人ともそれぞれ映画音楽や舞台音楽でも名曲を残したが、とりわけ小津安二郎監督作品の「東京物語」「秋刀魚の味」等の音楽を担当した斎藤高順（たかのぶ）は、小津映画の作品効果を高めた蔭の功労者であろう。その後、航空自衛隊航空中央音楽隊長を務めた。（その際、音楽隊では初めての 1 等空佐に就任）。後に警視庁音楽隊長となる。音楽学校生同期は他に萩原哲晶（植木等のスーダラ節作曲）、梶原完等多数いる模様。



芥川也寸志、團伊久磨、斎藤高順、奥村一

（軍楽師群像）　数多くのすぐれた陸海軍・軍楽師の中から印象に残る 4 名について紹介する。

永井建子（ながい　けんし、1865― 1940 年）明治 11 年陸軍軍楽隊幼年軍楽生となり、 シャルル・ルルーらに師事、13 年首席で卒業。明治 24 年軍楽次長、日清戦争、威海衛作戦参加。『雪の進軍』を作曲。明治 37 年仏留学より帰国。陸軍戸山学校軍楽隊楽長。陸軍一等楽長（陸軍軍楽大尉）は軍楽部の最高位（昭和 17 年に陸軍軍楽少佐が新設。明治 43 年（1910 年）、日英博覧会のため部下 35 人を引き連れロンドンへ出向く。航海途中半年間上陸した各所でオーケストラを率い 3,700 曲を演奏。大正 4 年、予備役編入。その後は、帝国劇場洋楽部部長等を歴任する。軍歌『元寇』、『歩兵の本領』作曲。

瀬戸口藤吉（せとぐちとうきち、1868― 1941 年）海軍軍楽師。明治 33 年、軍艦行進曲を作曲。　明治 14 年、海軍の第 2 回軍楽公募生に応募し採用された。明治 27 年に海軍軍楽師。「海軍軍楽隊への弦楽の導入」「東京への海軍軍楽隊の分遣隊設置」「海軍軍歌の整備編纂」の 3 点に尽力。明治 44 年イギリス国王の戴冠式に軍楽隊を率いてヨーロッパ各地で演奏、大正 3 年海軍省が「海軍軍歌」を制作した時、編纂に当たり「日本海海戦」「艦船勤務」を発表。大正 5 年に海軍軍楽特務少尉を定年退官。7 年 5 月 10 日に後備役。その後は事実上楽壇の表舞台からは退いた。昭和 12 年に**愛国行進曲**の作曲公募第 1 位となり再び脚光を浴びたが、この頃よりリウマチで歩行困難。（歌詞の公募では鳥取の青年が当選したが、佐々木信綱と北原白秋の編者が原形跡形もなく改ざん、二人の編者は後々、口も利かぬ大喧嘩になったと言われている。白秋の長男・隆太郎氏が語るには、昭和 14 年正月、両家が湯河原の旅館で偶然会い、白秋から挨拶、和解したとのこと。

内藤清吾　海軍軍楽隊の最高位まで登りつめた最後の軍楽少佐。昭和 10 年代、その指揮・演奏レコーディンは最も多い。いわば海軍軍楽隊の看板隊長であった。映画『上海陸戦隊』（昭和 14 年東寶製作、原節子等出演）は海軍が全面的に後援、その音楽指揮を行う。戦後、東京都吹奏楽団の団長を務めたが、その後、旧海軍軍楽隊出身者たち23名の隊員によって昭和24年7月で東京消防庁音楽隊を編成。

大沼　哲（さとる、1889 年―1944 年）。　最終階級は陸軍軍楽少佐。米沢工業から 1907 年陸軍戸山学校に入校し、首席で卒業。戸山学校軍楽隊在勤中の 1925 年にフランスへ作曲を学ぶ為に留学。スコラ・カントルムで学び、ヴァンサン・ダンディに師事。戸山学校軍楽隊長を経て、太平洋戦争時は南方軍総司令部軍楽隊長。1943 年に陸軍軍楽隊では初めて少佐に昇進。1944 年 10 月、フィリピン沖で乗船の輸送船「白鹿丸」が撃沈され隊員 25 名とともに漂流し、部下を励ましながら、時化で流され不明。大沼の功績としては、フランス式喇叭鼓隊の導入と戸山学校においてのソルフェージュ導入による音程教育。作曲の才能は山田耕筰がライバル視して警戒するほど高かったと言われている。不幸にも早世したことに加えて交響曲、チェロ、ピアノ協奏曲などの作品の多くが不明。現存する作品は行進曲などの吹奏楽曲が多い。この他、マンドリン作品は今日でも演奏される。交響曲『平和』（1923 年）等多くが大震災で焼失したのが惜しまれる。　以上。